

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	尾崎 裕子 (おざき ゆうこ)
○学位の種類	博士 (文学)
○授与番号	甲 第1007号
○授与年月日	2014年9月25日
○学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項 学位規則第4条第1項
○学位論文の題名	Portraits of Spiritual Isolates: A Study of Egotism in Nathani Hawthorne' s Works (孤独な魂の系譜—ナサニエル・ホーソーン作品にみられる エゴティズムの研究)
○審査委員	(主査) 川口 能 (立命館大学文学部教授) 中川 優子 (立命館大学文学部教授) 丸山 美知代 (立命館大学文学部特別任用教授) 高島 清 (立命館大学名誉教授)

<論文の内容の要旨>

本論文はアメリカ小説家の先駆的存在ナサニエル・ホーソーンに関するものであり、ホーソーン作品の核心的テーマである「エゴティズム」の問題を論じている。国家の発展とともに近代的個の賛美へとなだれ込んでゆくアメリカ社会にあって、ホーソーンがその風潮に安易に同調することなく人間の心と罪の問題の本質に迫ろうとした点に注目し、短編作品から長編作品へとほぼ発表順に取り上げながら、古くて新しいエゴティズムの問題を、主として個々の登場人物の内面を綿密に分析することによって考察している。

論文は、Introduction、第1章“Hawthorne’s Early Tales: Fictionalizing the Communal Egotism in History”、第2章“Hawthorne’s Short Stories around the 1840’s: ‘The Unpardonable Sin’, or the Egotism of Artist”、第3章“*The Scarlet Letter* and *The Blithedale Romance*: Tales of Human Frailty and Sorrow”、Conclusion、Notes、Works Citedの全117ページで構成され、各章の内容は以下の通りである。

Introduction : 本論文の目的が述べられている。過度な自己信頼にはエゴティズムを醸成する危険があり、それが行為の問題ではなく心の問題であることをホーソーン作品を精読することで明らかにする。さらにホーソーンにとって「許されざる罪」とは他者への共感の喪失と孤立にあることを詳らかにするのが本論文の狙いである。

第1章：大学卒業後のホーソーンが外界との接触を断って創作した1830年代の短編作品を分析している。建国の地ニューイングランドにおける植民者とネイティブ・アメリカンとの争いや独立戦争前夜の混乱を取り上げ、時代の熱狂の渦中に巻き込まれた個人が体験する醜悪な側面が、人間をいかに邪悪なものにするか、あるいはどのようにして人間のうちに潜む邪悪さを引き出す契機になるかを寓話的手法で描写していることについて論じている。

筆者は「僕の親戚、モリヌー少佐」“My Kinsman, Major Molineux”、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」“Roger Malvin’s Burial”、「若いグッドマン・ブラウン」“Young Goodman Brown”等の、善良で道徳的な生き方を求めているように見える登場人物たちの自己欺瞞的な言動や思念に注目し、それこそがエゴティズムであることをテキストの詳細な読みと巧みな解釈を通して明らかにしている。また歴史上の過ちに目を背ける同時代人の欺瞞的態度を作家が批判していることにも言及している。

たとえば「僕の親戚、モリヌー少佐」では、ロジャー青年の叔父で王党派のモリヌー少佐が、英国からの独立の機運が盛り上がる真只中で、大衆からリンチを受ける。その場面を目撃したロビンは暴徒と共に、いや「誰よりも大きな声で笑った」と書かれている。筆者は叔父を頼って町にやってきたイノセントそのもののロビンを嗤った理由をテキストの緻密な読みによって見だし、彼の中に隠されていた悪なる面が徐々に現れたのだと述べている。またロビンを形容するのに使われる“shrewd”という言葉に注目しつつ、その本質が明かされる過程を追っている。さらにロジャー・マルヴィンとグッドマン・ブラウンも、ロビンと同様に表の顔とは違う隠された内面を持っており、その冷徹さや自己欺瞞が二人を破滅に追い込んだことを、論拠を丁寧に拾い上げながら論じている。

第2章：1840年代の短編作品から「あざ」“The Birth-mark”、「ラパチャーニの娘」“Rappaccini’s Daughter”、「美の芸術家」“The Artist of the Beautiful”、「イーサン・ブランド」“Ethan Brand”をとりあげ、それぞれの主要人物が、科学者、芸術家で「許されざる罪」を追い求める探求者であることに注目して、知的探求に没頭するあまり人間的な暖かい共感の気持ちを失うエゴティストであると論じている。ホーソーンにおいて常に問題となる「許されざる罪」とは、元来宗教的な意味で、人間が犯す神に許されない罪ということであるが、ホーソーン作品に照らしていえば、作家自身も述べているように、それは行為というよりは魂の問題であり、心の冷たさを指すとしている。そして人間は皆、知的、道徳的、精神的に不完全な存在であること、つまり等しく限界があること、過ちを犯しがちであることを認めずにどこまでも人間心理の深みを抉り出し続けるエゴティズムを「許されざる罪」と呼んでいると述べている。また人生の傍観者となった「夜のスケッチ」“Night Sketches”の語り手や「林檎売りの老人」“The Old Apple Dealer”などの例を挙げて、ホーソーンが自らの中に認めざるをえない作家としての傍観者性をエゴティズムの表れとして認識していたことにも触れている。

圧巻は「ラパチャーニの娘」に関する分析で、娘のビアトリスの体で毒の耐性実験をする

天才科学者ラパチーニのエゴティズムを詳細に論じている部分である。偏った愛情と自らの野心ゆえに娘を失うラパチーニはエゴティズムの権化そのものである。だがそれはごく当たり前の読み方で、本論文で注目すべきは、ホーソーンにとって、科学者として純粋な理想家ラパチーニよりもビアトリスの恋人ジョバンニとラパチーニの学問上の仇敵バリオーニの狡猾さや俗悪さのほうが罪深いとしている点である。

筆者は、無理解な人々に囲まれて美を追求する「美の芸術家」に文字通り芸術家の「エゴティズム」が見てとれるとして、芸術家オーウェン・ウォーランドが完璧な作品を作り上げるために超然たる孤立のなかで生きるうちに、人間としての暖かい心を失ってしまったと解釈している。またホーソーン自身も作家として人間を研究するために、常に自己と他者の心を探る作業をしなければならず、それは知的・心理的探求者としての自己批判ともなっていると述べている。さらに筆者は「美の芸術家」批評において一般的であった、オーウェン・ウォーランドの芸術家としての成功つまり天上の美を手に入れたことへの賞賛で終わるべきではないと考え、心血を注いで完成した蝶のおもちゃが赤ん坊の手で握りつぶされてしまうことに表れているように、芸術のためとはいえ、自ら孤立することでオーウェンは人間として失敗者になったことに注目すべきだとしている。

同時期の「イーサン・ブランド」では、許されざる罪を探求するために生涯を費やしたブランドが生業にしていた石灰焼き釜に身を投げた翌朝、心臓だけが燃え残っており、その時の景色を輝かしいものとして作家が描写していることから、罪の探求に生涯を捧げたにしても、ブランドに悔い改めの気持ちがあれば神の恩寵が与えられる可能性があることを指摘している。この点に注目した筆者は「許されざる罪」というタイトルで長編作品として計画されながら未完に終わった本短編作品が、次章で扱う長編作品に繋がったと判断している。

第3章：後期の長編作品のうち『緋文字』*The Scarlet Letter*と『ブライズデイル・ロマンス』*Blithedale Romance*を取り上げ、エゴティストの例として前者のチリングワース、後者のホリングズワースとカヴァーデイルに焦点を絞って考察している。短編における寓意的、キリスト教的倫理観の見地からの批判的姿勢は残しつつも、ホーソーンは、これらの作品において善悪では判断できない「人間の弱さ・哀しみ」をも提示していることを指摘している。妻ヘスターの裏切りを知った医師で科学者のチリングワースが復讐の鬼となったエゴティストであることは間違いないが、同時に弱く哀しい人間であることが明かされていることを例示しつつ論証している。

『ブライズデイル・ロマンス』のホリングズワースは社会改革者、実験農場の指導者として、人間生活の改善やよく生きることを実践する一見善意の人だが、筆者によると実は自己欺瞞にみちたエゴティストである。彼のエゴティスト性によって農場の計画が破綻を来すだけでなく、生活を共にした人々が破滅に追い込まれたと述べている。一方、カヴァーデイルは詩人・作家であり、彼らとは違う意図、つまりそのような人々を観察するという目的をもって傍観者として参加する点に注目している。この作品はホーソーンが実際に

関わったブルック・ファーム実験農場をモデルにしていることは周知のことであるが、文学者カヴァーデイルに物語を語らせる手法をホーソーンがあえて選んだことについて、人の心の中を冷酷に探り続ける作家であることの苦悩と自己批判の気持ちをホーソーンが表していると結論づけている。

Conclusion: 作品の長さや手法の特性ゆえ、長編作品ではエゴティストたちの内面が比較的丁寧に描写されており、作家の人間理解がそれまでより深まったように見える。だが筆者が丁寧な分析によって明らかにしたように、ホーソーンの人間への深い洞察力はすでに初期の短編作品において完成していたと結んでいる。

<論文審査の結果の要旨>

4名の審査委員が合意した評価内容を以下に記す。

ホーソーン作品特有のテーマと寓話的物語手法は現代文学にも多大な影響を与え、今も作家、作品研究が盛んに行われている。しかし最近のホーソーン研究の動向を見ると、作家の一貫した思索の中心的テーマであり、すべての作品の核心をなす「人間の心と罪」の問題を迂回して周辺的事項を研究するものが目立ってきている。そんな状況のなかで、本論文は緻密なテキストの読みを頼りに真正面から「基本的で包括的な」「人の精神的孤立というエゴティズム」の問題に取り組もうとした意欲作である。全体として、エゴティズムの問題を『トワイストールド・テイルズ』*Twice-told Tales* 以後の作品だけでなく、それ以前の初期の短編作品においても検討し、それらが後の長編作品と無関係でないことを論証したことは特筆すべき点である。

ホーソーン作品における孤立する魂の問題を、初期の短編作品から後の長編作品までに視野を広げて論じており、論旨に概ね一貫性がある。『緋文字』において、チリングワースがヘスターに人間的ふれあいを求めていたことに言及しているのも筆者のテキスト精読の成果であり、彼を人間的に検証することにより、本論のテーマのエゴティズムについてさらに理解が深まることを証明している。また彼の左肩が右肩よりあがっているという描写については、彼の精神的歪みを見る先行研究を発展させて、彼の“heart”が“head”より強いことを示唆すると述べていることでも分かるように、テキストを丁寧に読むことをおろそかにせず、テキスト中のちょっとした表現に注目して先行研究よりさらに一段階読みを深めており、思いもよらない主人公たちのもつ心の闇、冷徹さを暴いている。文学理論優先でテキストを読みとばす風潮のなかで、テキストにある一言一句にこだわる読みの姿勢を大いに評価すべきである。

審査委員からは以下のような意見・要望もあった。

- ・キーワードについては部分的にやや説明不足になる傾向があるので注意すべきである。
- ・第3章の長編作品については、視点をチリングワースとホリングズワースとカヴァーデイルに絞った意図は十分理解できるが、ページ数の制限もあり、論を十分展開しきれていないのが悔やまれる。この部分についてはさらに発展させるのが今後の課題であろう。

・ホーソン作品の場合、多様な読みが可能になるのは当然だが、筆者には生真面目に読んでしまう傾向がある。ホーソンにも皮肉や韜晦があることを確認して今後の研究に生かしてほしい。

上記のような改善点が指摘されたものの、先行研究論文を渉猟し、それらをよく理解していることが明らかで、特にあまり触れられない短編作品にも目配りができていることが確認できた。さらに先行研究を鵜呑みにせず、同意できない点について自らの意見を明快に述べている。その解釈の斬新さと説得力は希有のものである。このように十分な根拠を挙げたうえで先行研究に挑んで行く姿勢は高く評価できるとともに、今後のさらなる研究成果が期待できる。また研究論文にふさわしい明快で高度な英語を駆使して注意深く書かれており、これは難解な内容を説明するのに大いに役立っていることも付言しておく。

以上を総合的に判断し、本論文は、筆者の意気込みが十分伝わるオリジナリティーに富んだ力作であり、課程博士論文に相応しい論文と評価できる。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公開審査は2014年10月11日（土曜日）午後1時から午後3時まで、諒友館827号教室で行われた。論文に関する審査委員の質問には十分な解答があり、曖昧であった点も解明されたことを確認した。審査委員会は、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在学期間中における学会発表などの様々な研究活動、また公開審査の質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認し、本学学位規程第25条第1項により、これに関わる試験の全部を免除した。

学会発表のみならず、すでに多数の論文を執筆・発表していることなどの点を総合的に判断して、審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第18条第1項に基づいて、「博士（文学 立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断する。